科目ナンバリング	U-LAS00 20002 LJ34						
授業科目名 <英訳>	自己存在論II Ontology of Self II			担当者所属 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授　安部　浩		
群	人文・社会科学科目群	分野(分類)	哲学・思想(各論)		使用言語	日本語	
旧群	A群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義（対面授業科目）
開講年度・ 開講期	2026・後期	曜時限	木3	配当学年	2回生以上	対象学生	全学向

（総合人間学部の学生は，全学共通科目として履修登録できません。所属部局で履修登録してください。）

[授業の概要・目的]

「自己存在」は人間存在を特色づける基本的な規定の一つであり、哲学史上、精神、主体、自己意識、実存、現存在、一人称といった概念の下で究明され続けてきたものである。時の古今を問わず、洋の東西を問わず、こうした考察が絶えず繰り返されているという事実は、「今ここにこうしてある私とは何者であるのか」という問いが、我々にとっていかに根源的であり、そしてまたいかに抜き差しならないものであるかをいみじくも物語っていると言えよう。

本講義のねらいは、「自己存在論I」と同様、そのような「自己存在」を基軸としながら、主として近現代の哲学における諸問題を考究し、もって受講者各人自身による思索の歩みを裨益せんとすることにある。但し本講義は、このねらいを「自己存在論I」とは違った仕方で追求せんとするものである。

もとより「ゼルプスト・デンケン（自分で考え抜くこと）」は、決して一朝一夕になしうるものではない。だがそれこそが哲学をすることの生命であり、そしてまた一身を賭して試みるに値する事柄であることを受講生諸氏が本講義を通して感得されんことを冀ってやまない。

[到達目標]

「ゼルプスト・デンケン（自分で考え抜くこと）」は、決して一朝一夕になしうるものではないとはいえ、それこそが哲学をすることの生命であり、そしてまた一身を賭して試みるに値する事柄であることを理解する。

[授業計画と内容]

自己存在の解明に対して現象学が行った貢献の多大さについては、今更贅言を要せぬであろう。特に現象学の創始者、E. フッサールがその主著（の一つ）である『イデーンI』において試みた「純粋意識」の精緻な分析との対決は、自己存在論の展開を自ら試みる者にとって必須であると言ってよい。

事実、今述べた対決を逸早く敢行した先達を我々は既にして知っている。その好例はM. ハイデガーである。ハイデガーはフッサールの議論の内在的批判を試みることで、彼独自の「現存在」なる概念を錬成したのであった。

「意識」（フッサール）から「現存在」（ハイデガー）へ。かかる立場の転回から、我々は自己存在について、一体全体、何を学びうるのであろうか。今年度の「自己存在論II」では、今述べた点を詳らかにしていきたい。

目下のところ、以下のような課題について、1課題あたり3-4回の授業を行う予定である(但しこの予定は適宜変更される場合もある)。なお授業回数はフィードバックを含め、全15回とする。

1. フッサールの『イデーンI』の概要
2. 現象学的還元と純粋意識
3. ハイデガーによる現象学の解釈とフッサールへの批判
4. 「現存在」の概念の意義と限界

自己存在論II(2)へ続く↓↓↓

自己存在論II(2)

[履修要件]

哲学系科目I・II（哲学I・II、倫理学I・II、科学論I・II、論理学I・II等）の中、少なくとも一つを既修していることが極めて望ましい。しかしながらそうでない場合にも本授業を履修して頂くことは可能である（その代わりに頑張って私の話に付いてきて下さい）。

[成績評価の方法・観点]

定期試験によって評価する。

[教科書]

使用しない

[参考書等]

（参考書）
授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

授業中に指示する文献を予習し、筆記した講義ノートを復習する。

[その他（オフィスアワー等）]

[主要授業科目（学部・学科名）]